郷土史研究家　渡辺庫輔

本会理事　大田由紀

昭和３３年（１９５８）長崎民友新聞で 14 回連載された「風中放談」は、長崎の生き字引だといわれた渡辺庫輔に、人物や歴史・芸術などのウンチクを記者が聞き取りしたもので、初回の紹介文に「渡辺氏は稀にみる博覧強記、反面人も知る毒舌家で人触るれば人を斬り、馬触れれば馬を斬るの概がある」と記されている。

古賀十二郎（右上）と渡辺庫輔（左下）昭和初めと思われる（個人蔵）

渡辺は、明治３４年（１９０１）本五島町（現五島町）の菓子屋の長男として生まれた。近所には長崎学の祖といわれる古賀十二郎の生家があり、幼い頃からその感化を受けた。

生涯の自慢は、郷土史を古賀に、短歌を斎藤茂吉に、小説を芥川龍之介に指導を受けたことであった。

長崎医学専門学校（現長崎大学医学部）教授として赴任してきた斎藤茂吉に短歌を学び、与茂平という名をもらったのは１７歳のときである。

大正１０年（１９２１）の暮れ、渡辺は東京の芥川龍之介を訪ねた。芥川は作家で編集者の佐々木茂索宛の書簡に「与茂平は行年２１歳だが中々見上げた学者だね　長崎史の通はさる事ながら　歌俳の事にも精しい男だよ」と書いている。９歳年長の芥川が一目置くほどの好印象を残している。

翌年、芥川は４月末からひと月以上を長崎に滞在した。渡辺の案内で市中を巡り、丸山で遊び、長崎を題材にした小説も書いている。滞在中、芥川の面倒をみた永見徳太郎は渡辺の縁戚に当たる。

渡辺は、大正１１年（１９２２）秋に上京、芥川家の近くに下宿して書生のような生活をしながら文学修業を始めた。

この年『中央公論』（６月１日発行）に「絵踏」を発表、執筆者には室生犀星や正宗白鳥の名前があるが、庫輔が最年少である。大正１２年（１９２３）創刊された『文芸春秋』には、２号以降、６回作品を発表している。もちろん龍之介の口利きもあったであろうが、前途洋々としたスタートであった。

しかしながら、庫輔は創作活動に行き詰まったためなのか長崎に戻った。芥川は愛弟子に叱咤激励の手紙を送っている。

「この時にあたり、空しく長崎の親父の二階に握り金玉（ふところ手のままなにもしないこと:筆者注）ばかりして将来の大計を考えずにゐるとすれば、庫輔の莫迦も極まれりと言うべし。君も行年二十五なり。この二三年の間に腕を上げねば、文学老年になり了るべし。わかりたりや」と、渡辺の怠惰を叱り、奮起を促している。しかし渡辺は筆を折った。

その後は郷土史研究にのめり込む。渡辺を含む若手の郷土史研究家１２人が『長崎談叢』を創刊したのは昭和３年（１９２８）５月であった。その１ケ月後に同メンバーで長崎史談会を発足させた。

渡辺は定職に就くことを拒み、「根本史料が研究の基礎をなすもの」という古賀十二郎の教えどおり、墓所の墓碑名を調べ、寺の過去帳を書き写し、旧家の文書を調べる日々を送り、史実を明らかにすることに専念した。

晩年の渡辺庫輔（堀田武弘氏提供）

長崎の鋳物師、時計師、阿蘭陀通詞の諸家についての論考を記し、特に遺作となった『崎陽論攷』は恩師古賀十二郎の本木昌造説を綿密に補強したもので貴重な資料といわれている。他にも『長崎ハタ考』『長崎土産昭和版』『長崎歌謡集（稿本）』などは長崎の風俗を知る上で欠かせない著書である。

昭和３８年（１９６３）６月死去、６２歳であった。前年の２月２０日から始まった長崎新聞「長崎町づくし」の連載途中で、その１７４回が絶筆となった。

参考文献：『芥川龍之介全集』１９巻２０巻（岩波書店 1997）　大谷利彦『長崎南蛮余情』『続長崎南蛮余情』（長崎文献社 1988・1900）

本稿は令和５年２月例会の発表要旨である。